

天然の岩床を跳ね下る余水（岩鍋池）

— 香川県観音寺市 —

（株）チェリーコンサルタント 本 條 忠 應

1. 岩鍋池の築造の歴史（沿革）¹⁾

岩鍋池（写真-1, 2）は阿讃山脈の西讃の主峰雲辺寺山の南斜面の扇の谷・本谷および逆瀬谷の約 1,000 ha の集水面積を有しています。池の堤は、大飛・菩提両山塊の間を流れ下る奥谷川の平野開口部でせき止めて築造されており、雲辺寺から太興寺への遍路道の途中、県道 240 号線沿いにあります。築造は、室町時代後期の大永 7（1527）年と伝えられていますが、100 年余りを経て寛永 7（1630）年、西島八兵衛により現在の位置に増改築されたとのことです。

しかし、明治 43（1910）年には大雨出水のため「盲堤」が決壊し、同年直ちに修築したという記録があります。「盲堤」とは、大水の時に盲堤の一部が決壊し、池水が放水されることで堤防本体を守るような工夫をされた比較的もろい堤防のことです。

さらに大正 14（1925）年、底樋を石穴に造り替える工事が行われました。この工事では鉱山で働いていた職人が水利総代の家に泊まり込みで仕事を続けたそうです。人力で「のみ」と「つち」を使って固い岩盤に穴をあけ、そこにダイナマイトを詰めて爆破しながら掘り進められました。堤防上には今も隧道竣工の記念碑が建てられています。

その後、隣接する新田村が上流水源に新池を築造するなどの変遷があり、長く水争いが繰り返されてきましたが近年に至り、池の新たな水源として昭和 49（1974）年香川用水の西部幹線を経て、直接導水できるようになりました。

さらに堤防の老朽化に対し、昭和 50（1975）年より五カ年計画で県営老朽ため池等整備事業が着手され、堤防の強化とともに樋門の改良、自動堰（長さ 12 m、高さ 1 m）を取り付けて余水吐を完備しました。池の貯水量は 36.6 万 m³、堤長 260.0 m、堤高 14.1 m であり、栗井・新田地区の農業用水源として重要な役割を果たしています。

2. 岩鍋池の余水吐の特徴

岩鍋池の余水吐は左岸側に位置し、地形（岩床）を巧みに利用した構造となっています（写真-3）。また余水吐（流下部、減勢部など）は自然の岩床がそのまま露出しており、流下する余水は跳水し白く輝きなが



写真-1 岩鍋池（全景）（中国四国農政局ホームページ）



写真-2 堤体と斜樋、土砂吐ゲート（平成 15 年）



写真-3 余水吐（手前から固定堰、向こう側が自動堰）

ら地形と一体となって「涼感」と「躍動」を醸し出し、巧みな先人の「知恵」を感じさせます。

3. 岩鍋池周辺の名所旧跡²⁾

(1) **粟井神社** 粟井神社は、粟井川を堰き止めてできた岩鍋池の畔に鎮座しています（写真-4）。祭神は天太玉命、古くは刈田大明神と奉称しました。大同2（807）年火災に遭い、当地杉尾山に遷座されたといわれています。承和9（842）年に名神社の列せられ延喜式では讃岐国の大社三座の一座となりました。天正年間、長宗我部軍の兵火に遭いましたが、江戸時代には領主生駒家、京極家の尊崇厚く社殿の造営や社地の寄進を受け、その後も幾度か修復が行われ現在に至っています。

(2) **あじさいの里** 粟井神社の境内には、昭和60年頃から粟井地区住民と市観光協会・市イベント推進協議会などの協力により、新名所づくりとしてアジサイが植えられました（写真-5）。

境内や裏山の斜面には青色や紫色、ピンクなど色とりどりの花を付けたアジサイが約3,000株植えられおり、6月に開催される「粟井あじさい祭り」では、大勢の参拝者らが色鮮やかなアジサイに見入る姿がみられます。

(3) **藤目城跡** 粟井神社の西方約300mに標高136mの藤目山があり、室町時代の初期に山上に本丸が築かれ、斉藤氏の居城として栄えました。しかし天正6（1578）年土佐長宗我部元親の襲来を受け落城しました。本丸跡は「ミニ四国88カ所」の石仏がまつられています。また西方約200mの山上に二の丸跡があり、以前は粟井神社の「御旅所」となっていました。



写真-4 粟井神社



写真-5 あじさいの里

引用文献

- 1) 香川県農林水産部土地改良課：讃岐のため池誌，pp.200～205（2000）
- 2) 観音寺市文化財保護協会，観音寺市観光協会：粟井神社周辺名所案内